



示 2
9329
1-3



神字日文傳序
我道者道之所以為道之理也
方之洲萬者之與所取為道者
與焉乃吾友氣吹合此為道
論之矣蓋此籍也其人中之
林之聖乎其奇說精考神字

傳文日字示由

2
4329
1

神字日文傳序
我道者。道之所以為道之道。而四方之洲。萬有之嶼。所以為道者。不與焉。乃吾友氣吹舍平篤胤。既能論之矣。蓋此翁也。其人中之神。學林之聖乎。其奇說精考。沸々涌出。

新編
神字日文傳序
卷一
第一
一

一採筆則萬言如流。讀其所著。古
史徵與傳而可知也。此道也。嚮者
有縣居鈴屋兩夫子。而高唱遠攷。
使人蹈其軌轍焉。其功其偉哉。雖
然比諸吾翁。則猶未免乎漏真遺
粹也。豈不可畏乎。翁邇者著神字

日文傳。需序於余。受而讀之。不
堪愉快掩惻之至。昔嘗有志於斯。
而未成焉。然而吾友之有此舉。使
余嘆美其為先鋒。而能破其疑陳
焉。其功亦偉哉。蓋其為書也。據古
書舊說。而知必當有神字。據太兆

之有驗體。而知神製之所由。據字
原之存。而知有五十韻。據多集廣
考。而知神字之無比於四洲萬嶼
之字。據正體。而知譌字。據彼而知
此。乃不取古賢先正所論。幽討深
索之未盡者。不取諺文疑似之論。

不取偽經妄書之亂真奪粹者。不
取數量甲子之字。跋文題言之說。
似可取而不可取者。是皆瞭々有
可徵者焉。其他確論定說之多。一
讀而可知耳。翁既著開題記。而有
論此事者。此書蓋雖有棄舊執新

者。而大意之所在。猶崑崙泰山塊
然一定而不復革焉。故彼記與此
書。表裡實相須。則讀者當參考其
異同也。於戲翁其何人。而能如是
也。蓋其志以為吾之所賜言者。苟
忠於神。於言皇。於國。則此書

當不朽於千載之下矣。苟否。則有
如秦人坑焚之災。其誓於神祇
也如是。是以其書往々慷慨憤愴。
洗濯天下之耳目。而不復顧前後
焉。然而世狗奴鼠輩之多。嫉之妬
之。將品々以其微力。而輒動乎萬

介之論。其不能然者。亦將一言一
默。謗誹於其陰翳之地。可憐哉。噫
其蓋知世唯有縣居鈴屋兩夫子。
而知此翁之所以為此翁也。夫友
友其心。心之所合。苟非所謂道。則
孰若無友之為愈也。今余之與翁。

即心友也。是故余之所言。翁採而
記之。翁之所說。余讀而信之。此書
之成。亦經余之手者居多。則吾豈
得不敢為虎豹貓鼬。而驅彼狗奴
鼠輩哉。然則天下獨有吾。而能知
此翁之。所以為此翁矣。請遂言之。

國^{グニ}ふはるゝに後^{ノチ}ふはくしらすをしいを
ゆめ諺文といへる相^モ成^{カレ}畏^コきやし神字
おめやめおとあふつらるは嚴^{イカニ}平^{ホコ}
もこす浦^{トリ}取^リめ契^ウへ後^ウを討^{カフ}ふか
ひ能^タら心^シ痛^シいぞの假^{カタ}令^トにこれと玉^{タマ}
ににやまひし神^{カミ}乃^{ガミ}麻^マ自^ミこられむ入^イ
も叙^シあるとす能^タ富^ト久^ク立^タいあそはれの

日文傳とあす義^イ訣^{ケツ}とを^{スリ}本^{マキ}とし
て^ヨ所^{シヨ}弘^{ヒロ}くさ^サやとめあらばおとし
神^{ガミ}乃^{ガミ}麻^マ契^ケを^イら^シて^イ甚^イも^ト貴^{タカ}き^イあれ
の^{カミ}神^{カミ}字^ジお^イら^シに^シ漸^シ干^ヒ乃^イ石^シあ^レれ
あま^ヲを^イら^シる^ヲ能^クあ^ルお^シも
あ^レる^ヲは^シめ^ル三^ツ茶^シ此^ニ道^{ミチ}め^トち^リ
相^ア田^タ饒^{ニギハヤヒ}德^{トク}といへる入^イ字^ジ斯^シが^ミ所^{シヨ}許^{コト}

6, 12, 23

神字日文傳上抄卷



平篤胤謹輯考

人門

越後国 高橋国彦

筑前国 相田饒穂

出羽国 佐藤信淵

校同

○まね取を凌て云べき事ども

齋部廣成宿禰の古語拾遺小。上古之世未有文字。云々書れ
みれど然らば實ハ神世子文字有し大と此論ひて。古史徴の

開題記。神世字此論といふ條よ。委く徴し論子依が如し。
日文の考む。彼條をなく見たり。但し彼條を見たり。然らば
是得ぬと。此事の多有は。れり。但し彼條を見たり。然らば
居る人もあは。と。論ひ直は。鬼不心奪はれ。みる人よし。あ

○神字日文傳上

一

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

だ。然るに怯き倫を。今ちて神世字れまると前小彼開題記を著せ
云ふ限に非ざる。依頃までは猶いまだ是を正しき文字あらむと所思依を考
牙定免ざりし故小。今世小神世字とて彼此寫し傳ふる中
は眞の物も有るなれど未考へ定ざれば熟くそ此信偽字正
きて後ろ傳ふ怯き物有らば傳ふをしと記せ依ぐ其後小も
何某くれのし此集する某社あく此神庫を傳はせりと言ひ
傳ふ依文字ども或異字異體を更小も言ハ父同字同體とい
牙ども寫し傳ふ依元を正し此書風のはなく。いづく々字形
の異小見も依或を奥書の異なるれど漏し遺を事なく人此
藏するを見る小於々聞ふ於々て募り求免於々自身も寫し。

他人小も寫しせて甚多く集へあるが中に今この書小著は
志傳ふる日文の草書ども此字體運筆小ふと心留りて其奥
書どもの小縁あらば聞ゆる。此を眞の物あらむも知れり
ら交糺し試むやと思牙ぞ糺を怯き便れく。いづか依文字の
草書とも知法加ぬ補む。左右小ねまて唯を正しく小取見此
みお正し或近き大ろ佐藤信淵が或人の藏するを借て見せ
ゑ依一卷此中小神世草文中世所謂薩人書也。いふ奥書依
依一枚り彼草書の字ごとの下り其が眞字とねがし死を付
するがあり。第三小舉する遺コレ此小目留りて熟く視む。半字
過依布どハ草字眞字々々符ひて見も依り。う於驚きはこ其

一卷ヲ神世行文。中古所謂肥人書也。といふ。奥書有る。眞字の
みの一枚あり。第一小舉とる遺文。其字も熟く視る。薩人書小
付ふる眞字と。同字や見ゆれど。少く異ふれど。既小寫し置と
依中小も三枚ばう。其體の眞字此有し事を思ひ出で。彼此
照し考ふる。小果して同字あり。始て前子寫し置お
る。鹿嶋神宮。大三輪神社。彌比古神社。鶴岡八幡宮。大和國法隆
寺。此庫中かど小傳ハレ。と奥書有る。草書どもを正す。あの
所謂肥人書也やある。眞字の草字依事を知り。と正。斯て其
肥人の書小。縦横父母の字原をも。記し傳と依字。然しも心著
べて。唯よそ裁配せて製れる子字の眞字をのみ視る。朝鮮

此いは由依諺文といふ字。小似み依小。此をえと彼諺文を採
て作れる。小は非じうや。半を疑をく成ぬるをよと思ふ。ハ
彼諺文。草書有る事を聞か。然る。小謂ち依肥人書。小は草
書あり。其體も。後世人の決て書出まじ。死意の表ふる。雲烟
の勢あり。まと年久しく次く。小寫し誤免。おとを見ゆ。と。自
然小。優美し。死様あり。加於上。件の社く。小傳ハれる。遺文やも。
元と正。各々草書のみ傳はりて。眞字の無を思ふ。小。此も。後
世人の諺文を採て作る物。あらま。しう。ば。何をも。薩人書
此如く。その眞字をも添て。書傳ふ。法き。小。右の社く。小傳ハる
依遺文。此外。小。え。お。不。數。多。同。字。を。得。お。れ。ど。も。一。枚。お。小。眞。字

の付ツキとるハ無ナ々々まむかの薩人書也。と云イハる一枚を得トクざら
はハらば右の社ヤくれるを是コレが草書クサショなりと云イハふとハ絶タギて考
子知ル法ホき便タビなくはと其草書クサショども或ハ鹿嶋神宮カシマノカミヤより出イる
云イハひ。或シハ三輪神社ミツルネノカミヤ小出コイるゆと云イハる字。彼此タチ小得コトクて何ナニも
三枚四枚サンマヒヨウマヒ抄テ寫シし置クと依ヨ成ニ鹿嶋カシマのノ小コまれ三輪ミツルネのノ小コはれ同
志シ奥書ウチカキある字ジハ一ヒトつとせて比ヒ較カウるヲ互タガうイはクくハ寫シ
誤アらズそ有レ運筆ウンヒツ字形ジギョウよく符アひテ正マ小同コトウじ書テ様サマあるガ三輪
のやいハ鹿嶋カシマ此コノと云イハひ互タガうイ奥書ウチカキ此コノ異イれるハ運筆ウンヒツ異イして
字形ジギョウ此コノ合アはルが多タ死シをもてモえシ一人ヒトの手テ小出コイる物モノから
交マ各オノ別ヘを依ヨ古人コノトキノの書カキ此コノ舊コノく某ナニくハ傳ツクハマるヲ殘ノコ寫シ傳ツク

依ヨ違ヒれれニや知ラれ又マその草書クサショども日本紀私記ニッポンキシキ小圖
書カキ察サツる。梵字フツジ小似コニとる書カキありて其字義シギの準據シュンコを詳サカしセ交マと
云イハふ依ヨ小思コシひ符アさ依ヨく字形ジギョウあるノや其疑ウタガをハらシ私記シキり
子有ルし書カキ字ジ梵字フツジ子似コニとシと云イハるヲ今イマ世セ乃ナ人ヒトも漢字カンジあら
ざる文字モノをハ依ヨて梵字フツジ小似コニありといハふが如スくハ漢字
小あらズばハ梵字フツジ小似コニあれど梵字フツジ不レ
も非レざる由ユありハ漢カン泥ニむベあらズはと釋シ日本紀ニッポンキ小肥人
書カキ此事コノコトを云イハひて其書カキの中ナカ乃ナ川等カハナドの字ジハ明アキ小見コミえトと
云イハるノ小コ其コノ小コ々々似ニあるガ右の草書ウチノクサショども小有コトふやも甚イ奇キ
く所思オモをハ立タうヘて彼眞字カノマコト此父母コノフチノある縦横テウコウの字原ジゲンを採
てテ々々視ミるノ小コ太タイ兆テウの驗體ケンテイ字象ジキョウとて製ツクれ依ヨ狀サマ小見コミある
依ヨて思オモふハト部家ベノ此舊說コノコトを神世カミヨ字ジを太兆タイテウの驗體ケンテイをり出

ある由いず依小思ひ符さま。右の如く諸方小出で。各く別く
小人此集るを。採り竝て考ふるところ。信り割符を合せ
あるが如し。と云はく。熟く符られむ。いづく疑ひ解きて。れ亦
熟く小考ふまば。朝鮮此諺文といふを。我が神世の文字此。古
く彼國小も傳はす。あるは。彼國人のち加し。らを加す。て。作す
改免と依物あらむと。う。扱く。悟り得て。い。めて。糾し。試む。や
や思ふ。予。此文政二年も。ま。鹿嶋詣り。志し。みれむ。お。扱
はし。置て。三月の望日。小。旅り。立て。常陸小。赴き。其。扱いて。小。下
總上總の國。くれる。教子。の。正。經歷りて。閏月。此。始に。家。小。う。予
正て。二十日は。う。わ。ハ。何。れ。と。爲。さ。し。と。依。事。とも。執。ま。加。ふ

以て在。於。る。小。圓明院。行智阿闍利。來れ。正。此。人。を。淺草。里。小。坐
當。小。て。余。が。方。外。の。友。あり。悉。曇。此。學。小。いと。精。しく。悉。曇。字。記
新。釋。とい。ふ。物。を。作。れ。正。此。學。あり。い。以。來。加。ば。う。り。此。秋。ハ。吾
未。これ。見。ぬ。此。頃。の。態。は。と。問。予。バ。近。地。ある。朝鮮。の。訓。蒙。字。會。とい
ふ。書。を。見。ある。小。漢。字。此。下。小。悉。く。諺。文。を。付。と。れ。む。此。を。明。免
試。む。や。と。思。ひ。て。其。事。小。い。み。扱。き。居。る。よ。し。云。ふ。う。ぞ。いと。歡
喜。あ。く。て。上。件。記。せる。事。ども。を。語。り。寫。し。持。と。る。肥。人。書。薩。人
書。を。も。示。せて。彼。諺。文。を。其。れ。の。皇。國。字。此。彼。國。小。古。く。遺。り。傳
は。れ。る。は。其。國。の。原。文。小。と。正。成。し。悉。曇。章。小。を。正。て。梵。字。の。用
格。小。用。ふ。は。く。彼。國。人。此。ち。加。し。ら。せる。物。と。見。む。と。云。予。バ。甚
く。感。ず。ろ。こ。び。て。然。も。有。ら。バ。疾。く。神。世。の。字。を。明。米。給。予。と。云

ふり。ほと思ひ發ちて。已もまた。諺文此成とる本とて明めて
むと。其事の見えとる書どもを。彼此と何れぐと索めて。屋代
翁小。訓蒙字會を借て。此書の事ハ第二文の伴信友小。朝鮮原
文譯語といふ物をのり。其の書ハ或人の藏とるを。轉借ある
原文小て書ふる傍。皇國言もて。崔孤雲傳といふ長き紀事を
ある故。其用格を知る小いと便ある書ある物。高田與清
小。朝鮮板の。衿陽雜錄といふ書ハ。漢字の下小。諺文を加ふる
形ど借て集り。衿陽雜錄といふ書ハ。農事直説といふ書と合
正朝臣の朝鮮を攻むる物小て。與清が藏とるハ。加藤肥後守清
の分捕本の朝鮮を一本れぬ。清正朝臣とて。吉田何某といふ。朝鮮
小贈られとるを。由ありて得と依あり。卷の初小。朝鮮王が宣
賜之記といふ朱印何て。表紙の裡。萬曆九年十二月日。内
賜吏曹正郎金瓚。農事直説一件。命除謝恩。右副兼旨臣盧と記
忘て花押あり。奧小。永嘉後學といふ印と。金瓚叔珍といふ印

と。二枚あり。此のハ所狭きわざあれど。所謂分
捕本の有状を。人小も知せは欲くて記し於。彼此合せ見て。
諺文此體字。委しく辨り考へふる。と第二文の下小記せる
が如し。斯て今著ハし傳ふる遺文等。找謂する肥人書。薩人書
小て。是やがて。神世此古字と。思ひ定ふる。不れむ有。ハ依。
○近世の人小。神代文字何てと論り。新井君美。然しぞ
始ふ。此云。以。前。小。いは。ち。神。道。學。者。ち。の。中。小。も。
等。れ。を。今。論。ふ。そ。は。其。著。され。る。書。等。小。か。の。上。古。之。世。未。
の。死。に。非。む。そ。は。其。著。され。る。書。等。小。か。の。上。古。之。世。未。
有。文字。云。く。と。何。る。古。語。拾。遺。の。文。を。擧。て。出。雲。大。社。に。神。代。々
て。傳。れ。る。物。あり。と。漆。を。も。て。文字。字。記。せる。竹。簡。あ。ま。と。有
り。其。文字。尾。張。此。熱。田。社。小。も。何。て。是。も。し。信。り。神。代。より。傳。は

是る物あらむ小を。神代小文字かしとは云、後ら交と言ひ。但し此字、秦の徐福が我が國小來れる時小、百篇の尚書を將來に記し、彼國人の云ふれど、然る物小ハ非じうと言れど、是非言れど、さるを徐福が皇國小來れる時小、尚書を將來に記といふ説を、元々小漢人の漫語小おきざれど、其由別小辨小あり。物ま小所謂神代字小あるも此凡小て五劫小、或も其字讀小はらざ依あ小。或も其體辨小はら小げら小る小何小。或は科斗書の如たあり。或ハ鳥篆小比小如小き小何小。は小と小肥人書小薩人書小何小。とを言はれど。ま小陸奥小比小佐小久小間小洞小巖小といふ人小。贈られど、書文字とて、古文殘小。已小候小こと小。ち小く小其小略小字小申小入小。候小豊小受小宮小の上小宮小。青石小文字小何小る小神寶小有小之小。候小事小元小く小集小。瑞小器小記小と小申小。引小て小記小され小。候小ま小と小出小雲小。大小社小も小熱小田小。社小も小神寶小。竹小簡小漆小書小と小有小之小。事小小小。候小是小等小。此小事小小小。ハ小形小の小如小く小小小。兼小也小。も小。今小も小現小在小。志小尋小。祿小出小。置小候小こ小ぞ小も小。候小て小。東小雅小。東小音小譜小。方小策小合小編小。お小ど小申小。

毛のりも記し置候といひ。ま小と小同文小通考小。片小假名小の中小ある小へ小。ノ小ツ小。此小三字小也小。肥人書小を採小れ小る小を小。いろ小は小假字小の中小れる小へ小。の小。等小の小字小ハ小。その小片小假字小。小小倣小ひ小て小。肥人書小を採小れ小る小こ小ぞ小疑小。あ小き小由小を小も小述小られ小。と小。然小して小。肥人書小を採小れ小る小こ小ぞ小疑小。非小也小。其小由小下小。小小辨小ふ小を小見小。は小ら小。其小説小の小當小不小當小は小。姑小く小杞小きて小。此小。然小し小。既小く小。今小著小は小し小。傳小ふる小字小等小を小見小。られ小。げ小ら小む小。り小ハ小。右小此小。如小く小言小は小る小。は小ら小く小も小非小也小。然小れ小ど小。近小世小。小小。形小。正小て小。あ小の小日小文小を小見小。了小。神代小。文字小あり小。と言小。する小は小。此小。主小を小始小。と小。云小。は小ら小。往小。ご小。屋小。牙小。京小。ある小。或小。や小。ご小。と小。形小。き小。僧小の小來小て小。家小主小。小小。往小。年小。神代小。比小。日小。文字小の小諸小體小を小集小め小て小。其小。説小を小書小。と小る小。書小の小。應小。永小。四小年小。比小。奥小。書小。何小る小を小。見小。た小る小。こと小。有小。し小。ぐ小。今小。思小。牙小。む小。寫小。し小。採小。ざ小。正小。し小。事小の小。い小。と小。惜小。う小。り小。き小。と小。語小。ま小。る小。と小。有小。り小。應小。永小。四小年小。ハ小。今小。年小。ま小。で小。四小百小。二小十小三小年小。小小。や小。あ小。ら小。む小。其小。書小。今小。ハ小。何小。處小。小小。う小。有小。ら小。む小。見小。ま小。わ小。し小。き小。物小。あ小。り小。

○寶曆十三年比ころ。尾張國八事山興正寺の諦忍和尚と云

牙みダ。以呂波問辨といふ書を著して。神世小。天照大神の勅
語をて。大己貴命小。裴普味譽彙務奈夜古堵茂知。爐羅羊紫紀
流度圍廚宍努蘓汗哆坡响馬嘉有於依爾。準利汨轉能摩數亞
世會舖列氣。といふ四十七音を。授賜牙正しうむ。大己貴命。そ
を受て。天八意命と共に。神字を作正給牙る哉。後代り漢字を
以て書換と正。聖德太子此時り。平岡宮と。泡輪宮と小納正て
在し。神字の記録を借出して見給牙るまや。古書小委く載
也。篤胤云。此説も。かの黒瀧の潮音が偽り作れる。舊事大成經
といふ物小記せる。妄説小本おきて。言ひ出とる説お正。此
諦忍といひし僧も。空華老人とも稱る。ぐくさく。著述ども
有て。博識と聞えとる小。大成經の事を。ぐく辨牙ざりし小。こ
そ。然れば此僧の神世り文字あ正と云るハ宜なれど。其本お
ぬる説も非お正。れ本第一文の下小論ふを。合せ考ふ。信し。

或人問。神代り文字何らバ。今世小殘正傳ハる。迄き小。一字も
傳はらざるを。いり小。貝原篤信が自娛集小。我邦上古無文字。
讀古語拾遺。及匡房箱崎廟記。而可知而已矣。此二書古代之作。
可佐證矣。或以爲。上世有國字者。妄説也。是無稽之言。不可信焉
といひ。太宰純が和讀要領り。吾國小文字お祀事也。先賢の説
明白お正。齋部廣成が古語拾遺序小。上古之世未有文字。貴賤
老少口々相傳。前言往行存而不忘。といひ。大江匡房の宮崎宮
記小。我朝始書文字。代結繩之政。即創於此朝。といひ。此朝とハ。
の時をさ。まこと三善清行が。昌泰四年の勘文り。上古之事皆出
せるお正。口傳故代り之事。應有遺漏。とかかり。此等三れ證とを。迄し。近

頃筑前乃貝原損軒も諸説小々正て吾國小文字か此事を確
論せ正損軒も吾國の記載小博覽お正し人れをむ其説もと
も信を信しと言ふ正いかゞ答兩儒者の論むるとまろ無稽
此甚し死お正君子は其知ざ依處小於て闕如也腐儒者ら胡
爲ぞ猥正小頑口字開きて知づる哉知らざと爲ざるや本邦
上古文字何正しおや晴天白日此如し何の疑ひ有らむ
然る小廣成匡房の輩深く考ふば上古小文字れいと言ふ
は無稽お正貝原太宰がぶと死其僻説小黨して證據小備ふ
るを何事ぞや一盲衆盲を引きて火坑入りぬといハ此事を
信し古人お正とて恃むべのらざ孔子は後世可畏といふ正

大凡そ異朝を崇めて其餘字蔑するを儒生の僻れ正貝原太
宰が輩日本小生れおがら其學ぶ所小僻して我國を鄙むる
は固陋の甚し死お正舊き神社りハ上古此神字今小殘正て
儼然と志て存在するれ正然れども深密小して通用しがあ
き故り世小ハ流行せざるれり末世小を漢字まとい呂波字
をかはど省易小して事用小便ある故り神字を社小深く
藏して有正おれ自然の勢れ正あ本邦のみからむ異邦も
上古の文字を通用せば後世小作れる新字盛り流行を依お
正次第小省易小走るが致を所おぬ實小も日用の書通小蚪
蚪書おどふては以此外小迂遠お正末世自然の勢小て然ら

ばる事を得ず。や記せ。去の以呂波問辨の説をくしくしき
但しかく論ひを論ずれど。末小漢字の事此み言ひて。神字を
著さ。正しうば。同國ある道樂菴敬雄と云。牙る僧。そ此駁論
を作。て論ずるを。我國の往古。文字有しと云。去。甚肯ひ
か。若文字あらむ。名山古跡。一字半點れ。とも残。正
在。法。小。遂。小。そ。此。事。あ。き。ハ。如。何。ぞ。や。特。う。億。兆。の。人。あ。ま。ば。
四十七字全。く。覺。え。ば。とも。せ。免。て。兩。三。字。あ。正。とも。覺。え。傳。ふ
法。し。や。言。正。し。う。ば。諦。恐。う。さ。補。て。神。國。神。字。辨。論。とい。ふ。書。を
著。去。て。神。代。の。神。字。儼。然。や。去。て。今。小。名。山。靈。窟。小。存。在。せ。り。汝
お。と。死。井。蛙。此。輩。の。知。と。ころ。う。非。妄。予。が。秘。本。あ。れ。ども。汝。が

輩の迷謬を愍むが故。己去とを得。む。謄寫せしめて。見る事
を許。と。と。第十。一。う。舉。る。遺。文。を。書。著。し。右。現。在。鎌。倉。鶴。岡
八幡宮寶庫といふ奥書。まで。を。載。して。予。が。前。小。舊。死。神。社。小
え。上。古。此。神。字。今。小。殘。正。て。儼。然。と。去。て。存。在。を。書。し。ハ。此。事
れ。正。と。記。せ。右。の。駁。論。を。著。せ。る。道。樂。菴。敬。雄。と。云。牙。る。僧。え。
字。辨。論。小。於。き。是。ぞ。今。予。が。著。は。し。傳。ふ。る。日。文。字。を。世。う。著。せ
て。見。る。べ。し。初。小。て。い。や。も。感。多。き。功。あ。正。る。法。此。を。於。ら。く。事。情。を。思
る。初。小。て。い。や。も。感。多。き。功。あ。正。る。法。此。を。於。ら。く。事。情。を。思
辨。を。作。れ。る。時。小。既。く。去。の。日。文。字。を。得。て。藏。と。正。と。を。通。さ。れ
ども。淡。く。尊。み。思。ふ。心。う。容。易。く。世。小。現。し。が。て。小。し。て。秘。藏。と
正。し。殘。敬。雄。が。上。件。の。ご。と。難。と。る。故。う。已。去。然。れ。ど。其。音。殘。配
や。を。得。む。て。神。字。辨。論。小。著。せ。依。れ。る。法。し。然。れ。ど。其。音。殘。配
ざ。去。を。鶴。岡。宮。小。傳。ハ。正。ある。小。は。元。々。り。音。譯。ハ。無。正。し。と。聞

えぬ。其を予往年かの宮北神主大友平翁と云人小相正し
時此事を問ふる小實了神字辨論小出せる文字神殿小納
何れど音譯ふき故了何事とも知れぬや云正也。あふ第十一
此遺文の下云をも見るべし。さて此以呂波問辨神字辨論
此二書を委く見おる事ハ往一文化八年小駿府小もの
る不ど釋日本紀小依て上古小文字有なりとを悟れる物
はやく此二書を讀てこれおむ真の神字ぞと云正也。雄秀老翁
其頃もかおて信ぞる心おく彼老翁と甚く諍ひたり。可近
頃お正て。此ぞ真の字れる證を得おる故。か論ふを今
志見ふ。取うしく所思おる。○陸奥國の塩竈社神主藤塚知
明ダ書る物の中。小以呂波問辨と神國神字辨論此事を記し
了。神字辨論乃作者の神字を甚大事小云て出せる。或見る
小何字書とる。外おし。彼僧も何を書とる物といふ辨ハれ
愚思ふ了。唐土も文字の國お正。其さへ蒼頡とゆ前小文字

あハ。蛮國小文字のおき國大分あ正。日本も神武の東征を正
前ハ。蛮國の内れ正。漢土とゆ甚おそく開け。神代とさハ。漢
土小て。周文王北頃小あ。殷の世六百有餘年。夏の世四
百有餘年。それゆ上代伏羲神農黃帝堯舜の世。まてを思ふ
も。何れ二千年おとゆハ。ふし。小文華の開け。の遅き事れを
む。上古小文字おし。と云ふ方お正。説小近し。其。上神代の文字
あ。正て。漢字を借ら。て有ら。聖徳太子や。安麻呂や。舍人親
王れ。ど。漢字を借ら。て有ら。聖徳太子や。安麻呂や。舍人親
と。し。神代小有し。小も。せ。人王小成。て。何。やら。知。ま。ぬ。文字
ら。む。無。も。同。加。依。べ。し。故。了。愚。を。神。字。辨。論。の。説。字。取。ら。ぬ。と。癡
臭。き。言。ども。云。正。此。人。を。か。の。傍。物。お。る。田。道。の。碑。と。い。ふ。物。を
取。出。と。る。人。小。て。尾。張。の。吉。見。幸。和。と。い。ひ。し。吉。見。幸。和。と。い。ふ。物。を
ぞ。西。戎。意。の。神。主。お。正。し。う。ば。か。く。論。ぶ。る。れ。正。吉。見。幸。和。と。い。ふ。論
學。辨。疑。とい。ふ。物。字。著。せ。る。中。小。神。代。了。文字。れ。し。と。い。ふ。論
あり。て。其。を。井。澤。長。秀。が。俗。説。辨。了。記。せ。る。説。を。季。く。せ。る。論。あ
正。き。然。れ。ば。藤。塚。が。論。了。る。所。も。そ。れ。小。習。ひ。て。小。ぞ。有。べ。き。今
世。の。宇。斯。兒。お。る。人。く。小。も。か。の。道。樂。菴。藤。塚。お。ど。心。趣。あ。ち
る。多。々。れ。む。猶。こ。し。小。似。と。る。癡。言。を。や。密。い。う。先。く。ら。む。其。小
了。諦。忍。和。尚。の。鶴。岡。宮。小。傳。ハ。れ。る。字。を。世。小。著。せ。依。と。正。其。小

驚オドロうはれて諸國シヨクの神社古寺シヤク不祕ヒ免置オケて遺文ウヰども此コノ次ツギに
小現コトハ生ナて今イマハかく數多アツク集ツめて考カウへ合アさハ依ヨる事コトとしも成ナ
小コ多タ也ナリ。然シカれど其シ現マハ生ナるとる字ジどもの中ナカ小コ偽イタ作シれテ見ミ
諸國シヨクの神社古寺シヤク小コ神世文字シヤクを祕ヒ有アリし事コトの由ヨ緒シ也ナリ第十三文
此下ココノ小考コト牙記シヤキをを見依ミヨべし。

○予オレ去シ此コノ日文傳フシを考カウ牙記シヤキに最中サナカ小コ時トキ々々高田タカタ與清ヨシキヨ二部ニブの
書シヤクを得エとて與清ヨシキヨ己ミガ去シの頃キタマ乃ナラバ舉トを知シれク也ナリ。は於見オケをトて
贈オケれる哉ナラバ見ミる小コ一部ヒトツ也ナリ。和字ワジ攷カウといふ書シヤク不シて三卷サンマク阿ア京キョウを
依敬光イキョウカウといふ僧ソウの寛政五年カンセイゴ此頃コノキタマ小著コトせる書シヤクある也ナリ。余オレも寫
志持シとれど信シのトク覺カクゆる字ジどもを多く舉トて加カの大成經テイセイキョウ

哉ナラバ引ヒちて註シし今傳イマツトふる日文フシ此草字コノクサジ字ジも舉トとてそ乃信ゆる字シ
等ナニもこれ附録フツロク小コ一部ヒトツハ神字シヤクの志シらシ也ナリいふ物モノ不シて去シを上ウヘ
野國ノクニ桐生キリウ里リある中澤ナカサワ宏ヒロ祭マツリちふ人のいと近く著カせ依書ヨシヤクある
也ナリ。附録フツロク小コ神字シヤク中臣ナカノミ祓正實ハクシヤクと云イハを附ツとて此コノを余オレもウ於オケて寫シ
志シ置オケ於オケる伊勢國イセノクニ龜山カメヤマある岩田イワタ惇德トクと云イハ人のみ於オケから書シて
阿波國アハノクニ名東郡ナトウノ佐那河内村サナカハチノムラある大宮オホミヤ八幡社ヤチマタノシヤク不納ヒナク免ヒとる中臣ナカノミ
祓詞ハクシを神世シヤクの物モノぞシ思オモひ過スとて其シ非訓ヒガクを正實シヤクとし師シの大
祓詞ハクシ後釋ノチシヤク此訓コノクをいふク誹シり此コノも舊事キョウジ大成經テイセイキョウを引ヒちて註シせ
る書シヤク不シ也ナリ。誰ナニも彼カノも加カの大成經テイセイキョウを眞マコトの古書コノコノと思オモひて引ヒ
はて其シ志シらシ也ナリ。今著イマカし傳ツトふる日文フシの草字コノクサジをも舉トて右ミダリ天王テンノウ

寺傳來神代文字也。此文字常陸國鹿嶋明神宮文庫亦有之。上
總國市原郡菊間村神主根本平佳胤記之。といふ奥書を記し。
はと阿波國大宮神主充長神名書といふ書を著ハレ。其書小
とて。同じ草字のやゝ異なるを舉て。右日神所告思兼神四十
七言記以傳之。國字起于此。といふ奥書をも載せ也。然して其
言小。かく此如く。天王寺。鹿嶋神宮。廣田神社。阿波國大宮小も
有也。然る小神世小文字おし。今世小有るは。偽作おすと云ふ
人あ也。實小文字おしとて。有と云ふおそ。御國を尊み稱る
義あるは。篤胤云。かくいふ意。といと愛ハレド。實小なき物
小神世と有來しよと。いけ。抑神代小文字おしと云ふ也。
のも疑ふべき事小非ばうし。

古語拾遺序小。上古之世未有文字。と有るを證とて。本居宣
長も古事記傳の首卷小。大御國小も文字れし。今神代の文
字おと云も。此何依え。後世の人此偽作おて。いふる足らばお
ぞ言牙れども。強言お也。加茂真淵を始也。宣長は皇國の道字
開くと云牙ども。漢意はおれ也。和漢混雜ある故小。明子知ら
也。強言をいひ出して。世人を惑ハレ事何也。篤胤云。縣居大人
鈴屋大人共。神
代小文字おしと。言れハ。考の麗ク也。おまど。漢意はおれ
也。和漢混雜ある學問と云牙る也。甚も。おらしき語をぞ言
ひ出さ。はさ小知依べし。漢意の博學ハ。御國の道此仇ある事を。
ふと牙博學秀才也。世小名高しと云牙ども。名小恐依事お
く。邪正眞偽字々工夫を付て。明小考へて。正し死法小近也。

くばし。御國の文字を加奈といふを。加牟奈比畧あ也。加牟奈
比漢字小譯しては。神字や書べし。日本紀。帝王本紀多有古
字。撰集之人屢經遷易とも。同紀比跋小。推古天皇御宇。聖德太
子。始以漢字附神代之文字。傍とも。卜部家の舊説。欽明天皇。
吾國比文字を止。於て。韓字のみ通用をばし。と常磐大連小勅
志。て。神代より傳來の古書を。韓字をもて書代させ給ふ。カ
三ヨといふ和字比傍小。神代の二字を附け。ア。テ。ラスとい
ふ和字比傍小。天照比二字をばし。如此く志。て。和訓小漢字を
付合せ。其後推古天皇の御宇。小麻戸皇子。儒釋の道字弘
免むとして。神代より比古事舊記の。和字比傍小。悉く韓字を

付しむ。せも有れ。神代文字有し。と詳あるを。無といふ
は。人の眼をばす。れ也。おと言。言。二の宏祭といふ人の説
も。あ。く。か。し。あ。大意をば
こ。て。記。せる。れ。也。中。小。を。い。ひ。得
ある。語。も。は。と。無。し。も。あ。ら。ば。

○伊勢國龜山人。岩田友靖と云。布人も。神字眞傳といふ書を
著して。今予が傳ふる。第四文小舉。とる草字を。明免とゆ。と聞
ら。也。然。ま。と。み。ば。う。ら。れ。手。して。少。う。其。事。を。記。せ。依。物。字。見。ば
依。小。此。も。か。の。大。成。經。小。と。て。立。と。る。説。あり。け。也。其。全。書。は。
い。か。が。有。む。知。ら。ば。此。友。靖。と。い。ふ。人。を。上。小。出。せる。惇。徳。と
云。人。や。同。人。う。又。ハ。親。族。小。て。有。る。也。
○は。と。近。お。ろ。大。野。尚。芳。が。寫。し。藏。と。依。皇。和。神。代。字。集。と。題。せ
る。書。を。見。と。依。小。今。傳。ふ。依。第。三。第。四。第。九。第。十。二。の。草。字。ど。も

我始矣。其餘くはくは此字等を擧て。その末云予あ言ふ。此は神世文字とて。いぞ古に神社の御庫小。虫食み遣れしを。遂小を散く小あてて。神世字とふ物也。永く失終あむ事のいと畏らば。遠き世まで小傳子足はし。天地と共る。長在し。是むぞ。かく書集むる小就て思ふ。神の御世小。文字てふ物は無し。一向言へは。事状をく思はざる故あら。え。あはて物のまおぞ小妙ある理を。四方の國く此極み。末世とても變るはくを非む。られむいぞ上於世小。神とち此神集ひる。政ごち。人草の妻子ら親びゆる状也。末の世此状小も違ふまじけむ。神此御世も字とふ物の無て。やハ有べき。然

るを。神世字とふ物ハ。傷事也。一向小言て相ふは。強言小。那を阿る。又或人の。此字のあと古書に見ざは。いと云ふも。已が足ざは。心のまふく。言ひ出ぬる。僻言小も。然を有れど。傳子小し文字。皆れがら。神代の物とも思ひ定難し。其が中。小も。以呂波歌とふ物の次第もて。書おせは。言ふ小も足。日とみ月よ。此文字も。漢籍此傳ハ。來し後。作れるれ。ま。は。とアイウエオ此五十韻の音も。次第おせは。も。上。世の所業小。あらじ。然れど。御國ある千ぢの語を。此五十韻の音小。通ふ趣を思ふ。一向小。神世小。は。五十音の次第おせる。は無し。とも言が。あし。あ。の書集おる字等。此中。小を。あ。び

フ三ヨといふ。四十まで七、於此音もて。次第とる字ぞ。其言此
 ちまゑ。字の形も他國不比ふ。法き物何ら。交實小千早ぶる神
 世の物ある。法し。然を有れど。千萬年。いや寫志小寫し於れば。
 文字此形も。上世の狀字失牙。依も多う。依べし。其ぐ中。小法隆
 寺小遺。正ふゆし。廢戸皇子此。寫し給子。一ひらは。筆の運び
 の狀。いや妙小志て。阿夜小加し。去く。尊死物小志も。加れ漢字
 をう。依を志み思ぶ人ら。去の字此さまを熟れ。死ひて。彼處の
 字。殘書ふらむ。不は。彼國此筆乃聖等。寶おして書傳ふる筆
 此法も。去の文字此妙お。依狀小。おも。正盡。燃る事字も。悟。志於
 法し。寛政七年。十二月十五日。上毛野國。れる閑亭。と記せり。お
 の

書も寫本不て。此、文を志せ。世の古學者ぶ。正乃。延言約言。おど
 用ひて書おせる。いと長き文。れりし字。其意も通え。難き。煩
 くて。通え。易。支。趣。小。い。ふ。く。切。免。直。いて記し。於。け。て。此。閑亭と
 いふ人。上野國。とを有ま。ど。何。ある。里。不。住。て。實。名。ハ。何。とい。牙
 正し。や。尋。出。そ。母。く。上。件。の人。く。此。言。ども。残。し。も。始。り。加。く
 べ。支。由。お。し。そ。母。く。上。件。の人。く。此。言。ども。残。し。も。始。り。加。く
 並。法。載。せ。依。お。や。は。神。世。此。文字。を。世。傳。へ。む。と。功。志。み。成。せ
 る。志。し。此。いや。愛。く。所。思。ゆ。れ。む。其。志。を。も。世。了。何。ら。は。し。知。志
 免。は。と。今。は。世。小。れ。支。人。の。多。加。れ。バ。其。靈。字。母。安。慰。米。む。と。此
 わ。ざ。り。了。れ。不。次。く。小。え。神。字。の。事。不。功。免。依。人。く。の。名。残。バ。所
 狭。き。を。も。顧。を。交。記。し。著。法。殘。見。む。人。煩。し。と。お。咎。免。そ。と。

○ 日文四十七音

○ 神字日文傳上

○ 十六

기 ^キ	기 ^コ	히 ^ヒ
기 ^ル	기 ^ト	히 ^フ
기 ^ユ	기 ^モ	기 ^ミ
기 ^フ	기 ^チ	기 ^ヨ
기 ^ツ	기 ^ロ	기 ^イ
기 ^ワ	기 ^ラ	기 ^ム
기 ^ヌ	기 ^ネ	기 ^ナ
기 ^ソ	기 ^シ	기 ^ヤ

日文を比布美と訓法し。此を舉ぐる四十七字をいはゆる
 比布美の次第小讀べき由字。誨方とるれ。故まを小
 依て。去て此字。片假名をそり扱。日
 文ちふ言の義を下小註ふを見る法し。

스 ^ス	어 ^エ	이 ^イ
아 ^ア	니 ^ニ	다 ^タ
서 ^セ	사 ^サ	하 ^ハ
어 ^エ	기 ^リ	기 ^ク
싱 ^ホ	허 ^ヘ	머 ^メ
거 ^レ	더 ^テ	가 ^カ
거 ^ケ	기 ^ノ	아 ^ウ
마 ^マ	기 ^オ	

다타五畫

다타多氏と音譯を法し。縦の義小て。丁一ト此五
 畫は上ある四十七音の字此母と爲て。縦韻小用方る。字

此ヲ要と何る所を摘て記さば。まお鹿北肩骨の形状は。



加くの如く小て其灼き地を縦小長く横を狭く下此
 方牙窄く其形を大む補。如此く小て明の徹るば
 うで薄し。およそ縦四五寸ばうで横を上方一寸六七
 小をゆて少ハ違ふ欠れど。此處小驗體字。十加くの如
 其規量ハ違ふことあり。漢國の龜トを傳方て其
 く畫死て灼く形也。然るを後漢國の龜トを傳方て其

を換用ふる小おなて龜甲は厚くて灼ぐとれば其
 灼き地を小さく薄く。加九れ如く川正赫ぐて此
 成穴といふ其穴の内小驗體字。十の之の如く畫おせ
 と成ふ也。此を龜ト法子素たり原非とて。うくる形
 を畫きて物去る小儂牙はあれど其元を鹿の肩骨此驗
 體成畫く地の趣は形どれるお依べし。其ハ周礼小太ト
 て法り原田也と見え説文小ト灼剝龜也象灸龜之形一
 曰象龜非縦横也。田の口也。龜甲小剝とる圍おり十
 ち中剝する驗形あり。十を象形也。ト字を製れる由
 多ク斯てま後十を象形也。ト字を製れる由
 太古非中トトとやう小画るあり。此を若くを
 とも奇妙しくいせも尊き由縁あり。げみぞ所思は
 不思議だ上小説へる漢字のト字もある古傳のち

小其法もと同法あれどよく符牙るを然る物ある小況
 て灼く物の龜甲ぬるが鹿骨を正は取ぬり便宜しと爲
 て對馬ト部北人々然内くそを用ひと依ぐ天智天皇の
 御世小令典を撰ば志免給ふ時よろお古風字止まて
 漢風子依らむと爲とはふ御舉お正しうば此時公り用
 ひ給牙る故小大寶令ふト非と記されぬ也義解りト者
灼龜也非者
灼龜縱横之文也と見え同く集解然る字漢土り邊むら
小灼驗爲非とも有を思ふべし
 ふきはく龜トはもぞ我が古の鹿ト北彼國小も遺り傳
 れ依物ある事の本字辨牙交鹿北正トを絶果ある故小
 龜トを用ひ其字神代の太非お正と言ひ成せ正ぞ思ふ

免るは未志き想像お正かしお不此事古史傳小委く註
牙れど此りはあぐ大略を
いふの ちて此字原を太非をり出とること疑おく所思
みお正
 依由を縦の五畫ハ驗形北十を裂て作れるふてト十
 は十を左右二おち別ち一を中の一を去り上は十の一
 残下小おけ下を十北一残上小付と依物ある法し横北
 九畫は田と正出とるふてはお○を□字圓小象ど正
 工を十北中の一残中斷して上下小付け下ハ□を斜
 小裂とる本北形をそ北儘小二畫子別ち用ひぬりと見
 え□□は□を縦小眞中と正裂て二畫小爲とるお正合
 は□を斜小裂とる上の一畫を○小象どれぬ小冠らせ

へを□字斜不裂ある下此一畫を其儘不引起しと依物
ぞ見えぬ也。但し此を唯ふうち見とる有のまふ言
人々く考ふ上件四十七音の字を六此五畫九畫を縦母
て定むべし。横父用ひて作れる故ふ日文とは言ふぬるべし。然る
は日文とは火文の義にて鹿の肩骨を波々辺の木火
もて灼て。そ此火坊此食法き文字音の符印と爲あるを
正出ぬ依言と見也。漢土のト非の字ども皆そはと布美
てふ言を開題記ふもの如く云へ依如く文字此漢音
を皇國の音不轉あて訓不爲と依あてと云ふは舊とる
説かれと舊見あるはく所思あり。そのト非ハ其ト相と

旧を見る料の 儲まと此四十七音此文字をまべて比布
設あれぞ如也。美と號とる故ふ其残やぐて一二三の數名ふとて余
以牟那夜古登毛知呂と四五六七八九十百十の語を
神語の片語いひ繼と依物あるはし。正訓を二万までの
五六七八九十百千あり其言の義良禰之幾留由章都
古史傳り委く註せるを見るはし。和奴曾遠多波久米加宇於衣爾佐里閉豆能麻須阿世惠
保禮計と云ふも此不準子て想子ば決えて片語あるべ
く所思ぬれど其義をい加ふとも知はき由ふし。此を知
えぬぞ中く小尊う依べき。然るを加の大成經といふ偽
命報名親兒倫元因心顯煉忍君主豊位臣私盗勿男道善
姁女蠶績織家饒榮理宜照法守進惡攻絶欲我刑と譯し

ㄱ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅏ ^ス	
ㄷ ^ツ	ㅎ ^フ	ㅏ ^ス	ㅏ ^ウ
ㄷ ^ト	ㅎ ^ホ	ㅏ ^ソ	ㅏ ^ホ
ㄷ ^チ	ㅎ ^ロ	ㅏ ^シ	ㅏ ^イ
ㄷ ^テ	ㅎ ^ヘ	ㅏ ^セ	ㅏ ^エ
ㄷ ^タ	ㅎ ^ハ	ㅏ ^サ	ㅏ ^ア

○神字日文傳上

○二十四

熱記

之成せゆ。

但しその縦横此父母字の次第を寫し訛れる本も多うれど今を四本とく符符る採て

て此を上宮太子の物し給て云へる大経を偽
 作れる潮音僧大御神の始了勅語云く此語を
 持ちてそを天照大神の御神の命の造り給り記し
 まと兼神の作世給へると貴命の造り給り記し
 天二神託其文字も記せり傳ふる故其作者を
 此二神託其文字も記せり傳ふる故其作者を
 いふと説を編上宮太子の近ごろ其宮く小傳ハれる字
 何くとの薩摩人白尾柱成形因説といふ物字始え
 事あれか此譯も挙て美の次第も合はれは假名の音
 さふ合さる物字や然れど其偽字も人の惑を開む
 多る字見るはし。出はて一本此奥書小此字。肥人書也と
 云牙依も由何依事れ也。そは次り舉る遺文の下小註ふ
 を見る法し。○儲あ此遺文了。ㄷ^タㄷ^テㄷ^ヨㄷ^コと表せる。父母此
 字原此次第ふとめて。五十韻の圖字作て試みる。左の如

文二第

ム	ヒ
ナ	フ
ヤ	ミ
コ	ヨ
ト	イ

決む
 けし。
 き去ふる音あり。といふ義をもて。○此上を裂れ開きと
 爲物あらむ。然れど此を試し言ふれむ。尚々考へて

字を縦横父母の字原此位ふとて著せる。五十音圖不
 合せ見るふ。○ハの二字餘れ也。此を視ぬ。縦畫此ト
 は例の如くぬきど。○を横畫の中ふお記畫あるが。いと
 不審きふお記て考ふ依ふ。まおトトト此五畫はふ
 多母字は用ふるのみふて。此字一音ふ用ふふや無れむ。
 四十七音。ふ於阿此二字足ざ依故。別はハの二字を
 作て給ふる物ぬるべし。かくて此二字を。ハ乃字此父
 畫ある。○此上を裂放ちとる物と見ゆ。ちう物し給ふる。
 神の御意を知らぬら祢ど。強ひて按ふる。ハハを發音の
 初ふ。自然ふ字を含みとる音ある故ふ。於阿ハ。其字を開

レ	ス	リ	ウ
ケ	ア	ヘ	カ
セ	テ	エ	
エ	ノ	ニ	
ホ	マ	サ	

タ	ツ	シ	モ
ハ	ワ	キ	チ
ク	ヌ	ル	ロ
メ	ソ	ユ	ラ
カ	ヲ	ヤ	ネ

ウ	フ	コ	フ	ウ
オ	フ	フ	フ	ウ
ウ	フ	フ	コ	ウ
ク	フ	ウ	ト	フ
フ	フ	フ	モ	フ
フ	ソ	ク	フ	ム

ウ	フ	ウ
オ	フ	フ
エ	フ	フ
ニ	フ	フ
サ	フ	フ
リ	フ	フ

右神世字天思兼命所撰云對馬國卜部阿比留中務傳之
 ○一本云右日文者日神勅思兼命所製也筆法祕傳者筆
 意把筆運筆全假離合廣文縮文以上七條卜部家口傳有
 之と森川士義が集る皇和神代字集小載せる中此一枚

但し二枚とも母希小横子作れる字も交れるが。前より
横此の縦の一躰小整とぬ形也。其
○此二枚の奥書を草
書眞書二體小兼とる奥書也。夫れ眞字を前小舉とる
眞字と比校依ふ。彼を横小書き。此を縦小作たる違ひの
みみ。全く同字也。然れを對馬國の卜部阿比留氏姓
家小傳了。天思兼命所撰と。いひ繼を來扱ること。實小
然る法し。但し前小舉とるも。此一枚も。今小その家持
る年月を記さぬ。何頃まで持傳了。何れも其傳了と
は一二家からては存らばと數十家有。阿比留氏を絶て。今
とぬが中の一の家。非ざるう。彼國人小とみてぬ。絶
比留と云し人と。相交れる由見えて。此人後了。西山順

泰と云しと記されとる。然るを前小舉とる日文の奥書
は決えて同族ある法し。然るを前小舉とる日文の奥書
小。中古所謂肥人書也。云了。此字前小といと信がと
く思了。了。此頃とく思るは。思ひ合を法き事あむ有
けぬ。其を法此形る草字を。やがて上ある眞字此草書
形るが。其由を第三小舉る遺文此。釋日本紀小和字の興
字問了。答の其一了。師說大藏省御書中有肥人之書六
七枚許。先帝於御書所令寫給。其字皆用假名。或其字未明
或乃川等字。明見之。若以彼可爲始。歟とあるハ。古史徴の
開題記小言了。如く。康保以前の私記此説と通えとる
が。夫の肥人書と云ふも。れく。夫と。前小う此開題記を撰

所謂肥人書也と云ふは中世と書傳とほふて此を肥
國人の書も存しを見とる人此奥書なるかと更
疑れず物あり。釈紀に肥人之書と之字を入れたるをも
然るを仁和寺書目、肥人書五巻と標して一部の書名
とせぬを信がとし、既小釈紀に六七枚許とあるをや、纔
過四十七音此字ふまむ大宇小書多むらむも六七枚
うち交れること、開題記に然る小新井君美ぬし此同文
も往く論牙るを見、然る小新井君美ぬし此同文
通考小右此釋紀の文と仁和寺書目小肥人書と有を引
きて肥人書とハ肥國人の書ありといふ人有れぞ。肥國
今の肥前肥後、万葉集小肥人と書とほ残。コマヒトと訓
等此國是あり。万葉集小肥人と書とほ残。コマヒトと訓
ふれど、肥人書といふを、高麗國の書をや言ひ々む。今も

朝鮮不用ふる文字。その體梵字の如く形る諺文と云
ふあり。今そ此國不用ふる文字あること古く正の俗か
る。然らど高麗の世。其國へ行はれし文字。我國小
傳ハり志を記せる書あり。むも知らむ。と言れぬと
此をいみじき非説あり。そは此説も。万葉集十一卷小寄
物陳思歌の處小。肥人の額髮結牙は染木綿の染し心字
我忘れえや。とある歌此肥人を常の印本小。コマヒトと
假字付とるを見て言れぬ。此を非訓あり。ヒ
ノヒトと訓。万葉集畧解小。ウヒトと訓。此を別論
牙る物。然るを此歌小。竝て。早人の名小。負ふ夜音いち
あり。

おぼく。吾が名字謂らせ嬪と恃まむ。と云ふ歌あり。早人
とを薩摩人の事なり。かく並ば載せると。仁和寺書目
録。小肥人書。薩人書と並ばて載せゆを以ても。我が肥國
人の書あること論ひ。殊小肥人字高麗人とする事
は。あぐ万葉集の誤訓を據と。をる外。正し。此證此
か。此事。形を。や。ま。此。朝鮮の諺文の吾國。傳ハ。正し。を記
せる書。形。ら。む。と。言。は。れ。未。小。肥。人。書。と。云。を。神。代。字。と
決。え。了。今。の。い。ろ。は。假。字。比。中。あ。る。の。へ。つ。を。や。が。て。其。和
字。あ。ゆ。由。不。言。れ。し。と。如。何。ぞ。や。を。ば。て。此。主。の。説。ハ。前
後。う。ち。合。を。交。ま。と。説。決。む。べ。き。事。を。も。穩。え。う。して。生。く
小。説。お。う。れ。と。る。説。等。多。う。れ。む。殊。小。か。の。諺。文。い。ふ。字
此。主。の。書。ハ。其。心。し。て。見。る。べ。し。殊。小。か。の。諺。文。い。ふ。字
を。皇。國。字。比。彼。國。も。舊。く。傳。ハ。て。遺。れる。を。原。と。爲。して。

近く我が應永の頃。彼國人比悉曇章小附會して。杜撰
れる字としも知られざるを。此主の博識。且とては。大
おぼしき思ひ。落さ。小ぞ有。其は。未。於。伊藤。長胤。が。三韓。紀
略。乃。方。諺。略。といふ。篇。小。洪荒。之。世。以。識。相。付。人。文。既。開。國
各有。文。篆。隸。旁。行。皆。通。其。故。西。韓。之。人。自。漢。以。來。專。用。漢。字。
篤胤云。大は長胤。何。小。と。て。説。へ。る。小。う。韓。地。小。は。漢。字
字。用。ひ。と。る。を。此。に。り。ハ。お。不。後。を。正。た。其。由。下。小。云。ふ。を
見。て。知。及。明。之。中。世。初。効。悉。曇。半。滿。之。製。爲。國。字。名。曰。諺。文。
と。記。し。彼。國。の。慵。齋。叢。話。といふ。書。小。世。宗。設。諺。文。廳。命。申
高靈成。三。間。等。製。諺。文。終。聲。八。字。初。聲。八。字。中。聲。十。一。字。其
字。體。依。梵。字。爲。之。本。國。及。諸。國。語。音。文。字。所。不。能。記。者。悉。通

無礙。洪武正韻諸字亦皆以諺文書之。遂分五音而別之曰：牙舌唇齒喉唇音有輕重之殊。舌音有正反之別。字亦有全清次清全濁不清不濁之差。雖無知婦人無不瞭然曉之。聖人創物之智有非凡力之所及也。といふる文を引きき。業話のこと。同書文籍彙の條。備齋業話十卷。共成文公所著と見えて。やがて朝鮮國の人此著せる書なり。予ハいよご其訓蒙字會ある。諺文字母といふ多條字。そ此隨書を見ど。訓蒙字會も。朝鮮の書。此書此事も。文籍彙小舉とす。の條。訓蒙字會三卷。折衝將軍行忠武衛副護崔世珍著。四字類聚諧作書。總三千三百六十字。皆記天地山川鳥獸草木器物顏色。每字下加音狀諺文及註。嘉靖六年序とす。そ此字母。まゝ造字の事を著せる訓蒙字會此文。左に舉るが如し。

初聲終聲通用八字

ㄱ 其 ㄴ 尼 ㄷ 池 ㄹ 梨 ㅁ 眉 ㅂ 非 ㅅ 時 ㅈ 異
 役 隱 乙 邑 音 疑

ㄷ 兩字只取本字之釋。俚語爲聲。其尼池梨眉非時異。八音用於初聲。役隱乙音邑疑。八音用於終聲。

初聲獨用八字

ㅋ 箕 ㆁ 治 ㅈ 皮 ㅊ 之 ㅌ 大 ㆁ 齒 ㆁ 而 ㆁ 伊 ㆁ 古 ㆁ 屎

箕字亦取本字之釋。俚語爲聲。

中聲獨用十十字

ㅏ 阿 ㅑ 也 ㅓ 於 ㅕ 余 ㅗ 上 ㅛ 止 ㅜ 要 ㅝ 下 ㅞ 牛 ㅟ 卍 由 一 應 ㅛ 伊 ㅜ 只
 中聲 不用 初聲

十七年不當れり。此を世宗莊憲王とマ實を皇國字の舊く
いふ。此は時に諺文を作れる由あり。實を皇國字の舊く
彼國も傳はり存れる。小原おきて作れる由あり。は朝
鮮といふは。師說の如く。いと古くは三韓の北に有し。一
小國北號をして。後に三韓。高句麗。獺貊。沃沮をといふ
國は混じ一つ小を爲す。朝鮮といふるは古く三韓を云
る。今の朝鮮の内北。南方半分ばうになり。三韓と馬
の三つ小して。馬韓ををち百濟あり。新羅を并韓の内
乃一國高麗もと。三韓とハ別小して。朝鮮獺貊をを
るどて。北方小何にかくて後りハ。古の三つは今を。右
國ををさして。三韓と云れれど。本を然ら交す。は今を。右
北國等字悉を法て。朝鮮といふ。抑去の朝鮮北國を。皇國
といと近に蕃國をて。彼地に往來あり事の始を思ふ

小。健速須佐之男命。高天原々り。天乃壁立た極み廻り坐す
て。新羅國を降り到き給ひて。韓地の嶋を。吾居はく欲せ
むと詔ひて。皇國に還り渡りませし。いと古くれど。此
時を彼地にいはど人類も無し頃の事とたがやれ
ば。此ははききて。是をて遙後。神武天皇に倭國に入り給
ふ時に。木國熊野北海中より。暴風に遇ひ給り。御從
小坐せる三毛入野命浪秀を踏て常世國に渡り給ひ。新
羅國に至り坐すて。その國王と成ままし。此事委くハ古史
辨子とて神武天皇に。そ北御裔の次く。彼處を治えと
卷子見て知る。後に其裔を皇國に還り來り。其を崇神天皇の御

世小新羅國王此子天日槍といふが來れり。此を那もち
其御裔あると。姓氏録右京皇別小新良貴彦波瀲武鸕
鷯草葺不合尊男稻飯命之後也。是於新良國即爲國主稻
飯命出於新羅國王者祖といはれり。新羅國へ渡り坐るも
實に三毛入野命あり
を。姓氏録。稻飯命といはるも御兄弟の間小。その時日
て傳り誤れるあり。此を例多ることあり。
矛の持來れる寶物小振浪比禮切浪比禮振風比禮切風
比禮おど八種あり。此を後小伊豆志比八前大神と齋
ある。いざ神と志きは彼三毛入野命の浪秀を踏て渡
り給ふ時小持渡り給ふるを持還れり。と聞ゆる小思ひ
合せて辨ふはし。此事委くハ古史傳小註されり。ち多日
あり小をくハ大略を云のみぞ。

矛の參來て後の事を東國通鑑小とわて考ふは。此後
此新羅乃始祖也。姓ハ朴。名ハ赫居西といふ者小。漢宣
帝と云ひらる王ガ。五鳳元年と云ひらる年小。新羅を知
り始。その由あり。此を崇神天皇の四十一年小當れば。
日矛の參來れる後を知れり。と志て。時代もく符り。東
國通鑑も。傷多き書あり。と。かくて仲哀天皇此御世小。
も。此を信あるは。く所思と。加くて仲哀天皇此御世小。
神の御誨小とりて。神功皇后新羅國を征伐あり。以し。う
む。速小服飛奉り。百濟國高麗國も次く小服ひ奉れる故
小。百濟國。日本府を建て。多く此官人を遣して。彼地を
治し。免給ひ。彼國くとりも。人多く參渡り來て仕奉りし。

ふみ日文あはまと。乃川等字明見之と説る字の正あく
存れるを以て灼然く日文を本ふて。諺文は末あることぞ。
釋紀字著せる卜部兼方々。開題記ふも記せは如く。龜山
院、天皇の御世々。花園院、天皇の御世何あまで此人
ふて。釋紀を其年間ふ出來とふふ。其ふ引くる私記。肥
人之書を古書と爲ふれば。其いや古記書あてしこと知
はく。大の私記を。康保私記と爲らむりも。諺文を製れ
てといふ。朝鮮の世宗が時とて。四百六十年は加ても
前あはる。其ふ既ふ古書と爲て。和字の始と爲べしやさ
言るはをや。よと彼説を。私記の説から。又釋紀此説と

爲らむりも。釋紀字記せる年を詳あらはれど。正安三年
ふ書寫北奥書ある。其年々て彼朝鮮の世宗が元年ハ皇
國北應永二十六年ふ當れど。百十九年間あて。然れど釋
紀。肥人之書の事を記せは年々て。朝鮮ふて諺文字作
せる年まで。其間二百年ばうてもや有はき。此をもて日
文のいと古く。諺文のいぬ後あふ事ハ。更り論ひぬし。
まふ諺文を。日文ふ原抄きて作れは字ぬるふと。上ふ引
出くる。初聲終聲通用八字此中ある。其。し。尼。口。眉。八。時
は。古。れ。ま。く。ふ。い。や。正。く。傳。ハ。れ。て。池。を。正。く。と。何
あは。ま。を。少。り。形。を。訛。て。傳。ふ。己。梨。ハ。正。く。ハ。コ。と。何。る。を

きを。下小し此付とあは訛あ也。予が集る日文の中
あはるは、諺文の訛字受とる。後 **非**を日文小て合那る
 人のちのしらせり字あ也。も、二本、コを己と作るが
 字。何小あてかく訛有傳牙あるう。もしくは朝鮮人のち
うら **○**異を日文うて工小あるを。此を疑那く世宗
 が時小改免とる那也。其を彼國小古く傳きるは。工あ也
 志こと。高麗國小鑄と也とい多。元祐通寶といふ錢の
 背文う。大北字を鑄付あるを思ふ。此を日文の字あ
 るをや。まは余心著て在る。田明院、行智が告知ら
号小て八年、おきあり。皇國は、堀河、天皇の寛治年中、小
何これ、行智が言ふ。此を宋の元祐錢小あらひて、高麗
小て鑄とる。あらむと云ふ。り、実、然るは、宋の元祐よ
也。朝鮮の世宗が時、まで、三百四十年、ばう也。小やあらむ

不元祐通宝の背文小くさく此字あ也。其を皆日文を
 訛也傳とるを鑄付あるが中、**工**字を鑄付とるあ也。大
 文小此字あ也を思ふ。今、**ち**て日文此九父字の中
 れる**○**字は、**下** **上** **十** 等此五母字小配せて、**ト** **イ** **エ**
 叶の五子字小用ふる字かれむ。諺文乃初終通用字此中
 小有べ也。初聲獨用八字の中、**小**出也。**○**伊也あるを音
 を訛れる此みあら也。悉曇小とて、字を製ると言也。
 悉曇の理字は、**子**小知ざる誤あり。然、**初**終通用字此
 中、**小** **○**字無ては、五十音圖小。ウラ平エワ此行を作也。き
 由、**那**きをや。初終通用字、た、の、あ、ら、む、九、字、無、て、を、叶、ハ、也
とを引合せ見て、**ち**て初終通用字とも小。右の如き誤、を
此、理、字、辨、ふ、也、し、**ち**て初終通用字とも小。右の如き誤、を

故を法をも思ふ法し然れど諺文といふ名も舊よ正其
國此俗諺不用牙る字を法由の名小ぞ有べ也。或は原文
とウける
書のあるも由あや言はぐ。日文もし諺文小依て作れぬ
何る事か正。字あらはし加は。字音作字用例後。の形らば彼諺文と同
丸。悉曇章と等しうぬ法きり。大小異みあて事痛からぬ。
上世の質朴ある風小く符ひて。字原の正しさを更小
も言は。文字音製字いせ正あく。諺文此謾あるとは。一日
小云法くも非ど。製字の正しきとハ。丁を縦とし母と爲
る。ス。フ。ツ。ル。ヌ。ク。ユ。ム。ウ。九音の尾聲小通し用ひて紛
る事形く。上十トの四画を縦とし母とあて。尾へを横
色とせる事も。夫れ小准ずて知る法し。

やし父と爲て。フ。ホ。ヒ。へ。ハ。五音の首聲小通し用ひて錯
法大や形く。合。コ。ゴ。リ。フ。エ。ロ。○。此八画を横とし父とあ
て。首色とせる事も。これ小准ずて知べし。
字音の正あきとは。ウ。ヲ。平。エ。ワ。ユ。ヨ。イ。エ。ヤ。此二行も紛
はあき事形ぬ。正しく作ちて。オ。ヲ。イ。平。とく別正て。其所
屬のいと正あきを以て言ふを正。諺文小を正て製れる
物あらはしうむ。如斯く正うらぬや。其はオ。ヲ。イ。平。エ。エ。
此差別を知得て。無用れる事の如く思ふを。舊き事小
て。七百年ば加正以來を。殊小然有しを。近ぶろ契冲法師
が明免とあまわ。世の人も。此差別字正を法き事を知と
れど。日文もし契冲僧が。此事を明免ざる以前小。偽正作

島田藏書

まゐる形らむるは。此差別も立まじく。おこオヲ。此所屬を
も年久^{トシ}く錯亂^{アヤ}に來れるを。此を吾師乃近頃^{チカ}明^{アキラ}えられ
志事^シ形れば。日文^ヒを^フし。我^ワガ師說^シの。世^ヨう著^アれざる以前^イの
人の。諺文^フと^フて物せ^ハぬらむ^ハは。決^キ米^メて錯^ア亂^{ラン}れ
て有^アべき^ハ。いや正^タを^シも思^オふ^ハ。後^{ノチ}人の^ハ作^スれる^ハ。
非^ヒざる由^ユを^シ知^ルべき^ハ。證^シの^ハ殊^ニり^ハ明^カなる^ハ物^ノぞ。^後人の^ハ作^スれる^ハ。
お^ハ不^レ總^ト論^ノ子^ハ辨^ズある^ハ說^ヲをも^シ合^スせ^テ考^ヘふ^ハべし。^加ければ^ハ新^ニ井^ノ
君^ノ美^シぬ^ハし^ハ。肥^ニ人^ノ書^ヲを^シ。朝鮮^ノの^ハ諺文^ヲ不^レや^ト言^ハれ^シ說^ノの^ハい
う^ハ。非^ヒ說^ヲあら^ハじ^ハや^ハ。○^ハち^ハて^ハ上^ノ件^ノの^ハ奥^ノ書^ヲ。筆^ノ法^ヲ秘^シ傳^ス者^ノ。
筆^ノ意^ヲ。把^シ筆^ヲ。運^ス筆^ヲ。全^ク假^シ離^シ合^ス。廣^ク文^ヲ。縮^ム文^ヲ。以上^ノ七^ノ條^ノ。ト^ハ部^ノ家^ノ口^ノ傳^ス
有^リ之^トある^ハ條^ノは^ハ。謂^フハ^シて^ハ今^ノ此^ノ不^レ著^シ難^シ。

十一
三

（印）

